



Title	和泉式部物語の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	岡田, 貴憲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11175号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55336
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Takanori_Okada_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名 岡 田 貴 憲

主査 教 授 後 藤 康 文

審査委員 副査 准教授 金 沢 英 之

副査 准教授 近 藤 浩 之

学位論文題名

和泉式部物語の研究

本論文を構成する全七章のうち第二部第二章と附章を除く五章は、すべて査読付き学会誌（うち、第一部第三章は全国学会誌『中古文学』、第二部第一章は全国誌『国語国文』）に掲載済みまたは掲載予定（第二部第三章）の学術論文に基づくものである。

さて、本論文の総論ともいえる第一部は、三条西家本を偏重したぶんに主観的・主情的なアプローチがなされがちであった従来の『和泉式部日記』研究のあり方に警鐘を乱打し、主要三系統の本文を相対的に評価しつつ何よりも厳密な本文の読解を優先する、客観的・主知的『和泉式部物語』研究への転換を迫る重大な問題提起となっており、読む者を納得させるに十分な論理性と豊かな説得力を備えていて、間然する余地はほとんどないものと判断される。当該分野の学界における反響も当然のことながら大きく、第三章の初出論文については、「書式に注目したすぐれた論」（山本登朗・関西大教授／『アナホリッシュ国文学』第2号）、「書写年代を溯らせることのできない現状にあっては、やはり」このような「本文の精緻な検証が求められよう」（加藤洋介・大阪大教授／『リポート笠間』No.54）、また、第二章・第一章の初出論文を取り上げて、「和泉式部日記は日記か物語か、自作か他作か、成立はいつか、跋文（草子地）を書いたのは誰か、三条西家本は善本か…といった積年の問題をゼロから考え直す時が来た、と感得される」（加藤昌嘉・法政大教授／『リポート笠間』No.55）というように、第一線の研究者たちが学界時評において一様に高い評価を与えている事実からも、その一端を窺い知ることができる。

これに対し、本論文の各論ともいえる第二部には、三条西家本の“改変意識”をめぐる申請者の新見ないしその過程における本文解釈に疑問の残る部分が、いくつかあるように思われる。たとえば、申請者が「問はせたれば」と解釈する三条西家本の本文「とはせたれば」は単純に「給はせたれば」の誤りと考えるべきではないのか（第一章）、同じく、紅葉が「深くなる事」の意に解く「ふかくなること」は「不覚なる言」と読むべきではないのか（第二章）、などがそれである。しかしながら、この点をもってして本論文第二部の評価を下げることは妥当とはいえない。なぜならば、それらはすべてこれまでの研究者たちが正面から向き合うことを避けてきた極めて難解な箇所であって、申請者の失着は、難題に敢然と対峙し合理的解答を導き出すべく格闘した果て

に負った、いわば向こう傷にほかならないからである。ちなみに今後は、三条西家本の“改変意識”を探る試みから各系統本文それぞれが有する表現世界の探究へと、よりいっそう研究の重心を移してゆくものと考えられる。

なお、最後に置かれた附章は、申請者の文献調査・整理・分析能力が遺憾なく発揮された出色の論だが、欲をいうならば、適宜図を挿入するなどして一段とわかりやすい論述を心がけてほしかった。

以上を総合するに、三年足らずで手際よくまとめられた本論文は、当該研究領域において斬新かつ豊饒な成果をもたらすものであり、課程博士学位申請論文としても最高の水準に到達していると判定される。類希な才能を天から賦与された本申請者は、秀抜な若手研究者としてすでに学界に名を馳せているが、将来はその牽引役となるべく雄飛することが期待される。